BSR 通信

BSR 通信ニュースレター第２号

平成 26 年 5 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室
〒170-8470　東京都豊島区西巣鴨 3-20-1
03-5394-3079（直通）

目次

１頁　：　巻頭言
２頁　：　さざえ堂だより
３頁　：　研究ノート
４頁　：　BSR 図書室・今後の予定

鎌倉で思うこと

キャリアエデュケーションセンター
小 櫻 英 夫

横浜に転居したのを機に、鎌倉を歩いている。鶴岡八幡宮・小町通りの駅前と並んで人気なのが長谷地区。ウィークデーにも人が溢れ、特に遠足や修学旅行の子供たちが目立つ。大仏が鎮座する高徳院、川端康成・大仏次郎・井上ひさしなどの手跡を展示する鎌倉文学館、そして由比ヶ浜に出るコースである。

神社仏閣には、それぞれ由緒書が置かれているが、その中で出色なのが長谷寺のそれだ。私の知る限り、この寺の「子供のためのお寺案内」が最も秀れている。

長谷寺には、十一面観音菩薩像と阿弥陀如来像が安置されている。

子供のための案内パンフレットは、手書きに近い、極めて薄いものであるが、菩薩と如来の違いが、実に解り易い文章とイラストで書かれており、私のような仏教音痴にも充分に理解できる。

六年間の大正大学での教員生活の宝は、多くの仏教学部の先生たちや学生に仲良くしてもらったことだ。

ある先生は「釈迦と弘法大師はどちらが偉いのか？」と質問され、こんな学生に仏教をどう教えるか、結構な工夫が要ると嘆いたし、実家の寺を継ぐ予定の学生は「寺を訪れる人々に、教典の内容を話すのが難しい。自分の説法が理解されているのかとても不安だ」と話してくれた。

私は長くテレビのプロデューサーとして、主にノンフィクション番組を担当してきた。ほとんど、仏教学部の先生や学生と同じ悩みの連続であった。

そこで見出した要諦のひとつは、次の様なことである。

「硬派ネタは軟派の手法で」「軟派ネタは硬派の手法で」

テレビは、政治や経済などの硬派ネタを伝えるのが不得手なメディアである。「画」にすることが難しいこともあるが、それより基本的なデータ（特に数字）が伝わり難い。

この弱点にいち早く気付き、テレビを使いこなした政治家が、元総理の小泉純一郎氏と名古屋市長の河村たかし氏。小泉氏はテレビで伝わりそうな部分だけに政策を省略し、ワンフレーズポリティクス手法を使い、河村氏は、国会質問にフリップボードを取り入れた最初の政治家（もっと早く、この手法を始めた議員も居たと思うが、名古屋弁を交ぜて、効果的に使ったのは、河村氏だと私は思う）。まさに２人の政治家は

は、硬派ネタ（政治）を軟派手法で表現した、最もテレビを知り尽くしていたと言えよう。軟派の手法とは、徹底的に判り易く卑近な例を用いて伝えることに尽きる。

一方で、軟派ネタ（風俗、グルメ、芸能スキャンダルなど）を取り挙げる場合に欠かせないのは、信頼性の確保である。「嘘っぽい」と思われたら、お終いである。徹底した取材に基づいて、論理的に展開して見せる、硬派の手法が欠かせない。

軟派ネタには、すでに一定の興味を持ってテレビに接してくれている前提があるのだから。

「硬派ネタ」「軟派ネタ」。誤解を生みやすい言葉だが、テレビ屋の乱暴さだと容赦頂きたい。

釈迦と弘法大師は軟派ネタであり、経典の解説は硬派ネタである。常に硬派ネタと格闘している仏教学部と、軟派手法に明け暮れている放送・映像表現コースのコラボレーションを提案したい。

実は、すでに両学部でいくつかの試みがなされている。仏教学部による「ボーズファッションショー」や「坊主カフェ」などは、軟派手法の試みであり、映像スタジオでの「般若心経」の収録は硬派的な試みであろう。

仏教学部と表現学部の合同ワークショップを定着させるなど、大正大学独自の「仏教表現」を生み出せないものか？「色即是空」の意味することを、映像表現したらどうなるか？

但し、小泉以降の政治のショー化やワイドショーの喧騒に堕すことのない節度を忘れてはならないが。

さざえ堂だより

新緑が眩しい季節になってきました。初夏の陽気に誘われて多くの人が足を運んでくださいます。とくに４の日はお地蔵さんの縁日ということもあり、地蔵通り商店街から庚申塚通りを抜けて、さざえ堂まで足を運ぶ人も少なくありません。また、「歩こう会」などのウォーキングツアーで訪れる団体参拝者もいらっしゃいます。板橋から巣鴨までの旧中山道の道のりは、歩くのにほどよい距離と立ち寄るランドマークの豊富さで人気があるようです。

さて、さざえ堂には多くの参拝者がいらっしゃいますが、訪れるのはなにも外からの「お客さん」だけではありません。学内でも学びの場としてさざえ堂は活用されています。昨年末から１月にかけて、『臨床心理学実務特講』（川俣智路先生）を受講する学生たちが 20 グループほどに分かれ、「さざえ堂を今よりも有効に活用するには」をテーマに、フィールドワークをおこないました。さざえ堂のお堂番の方々へのインタビューをはじめ、庚申塚商店街の人々、実際にさざえ堂にいらっしゃった参拝者への聞き取り調査などをおこない、さざえ堂の現状、魅力、問題点と改善策などをまとめました。学期末にはグループごとにレポートを提出し、BSR 推進室にもその研究成果の報告を届けてくれました。

まとめられたレポートの中には「さざえ堂の場所を聞かれることが多い」という商店街の方の声がある一方、「看板など案内がなく、入っていいのかわからなかった」という参拝者からの声もありました。そのほか、「観音さまだけでなく、大学や地域の歴史資料を展示してある場所があるといいね」というような話もありました。こういったさざえ堂への意見は、さざえ堂、ひいては大正大学に対する期待があるからこその声だと思います。学生さんたちのフィールドワークによって「地域の声」を聞くことができたのは BSR 推進室にとっても大きな収穫でした。

今回フィールドワークに参加した学生さんたちにとっても、身近に学びの場があることはよいことでしょう。仏教建築、仏像、参拝者、地域活性化など、さざえ堂には多くの学びの材料があります。さざえ堂は学びの資源としても大きな可能性があるに違いありません。BSR 推進室では、各学科の講義、ゼミなどでの仏教資源の活用をおおいに歓迎いたします。

研究ノート

BSR のいう “社会” とは？

BSR 推進室では BSR（Buddhist Social Responsibility）を仏教者の社会的責任という意味で扱っています。社会的責任は社会貢献よりも幅広い７つの要件（①説明責任、②透明性、③倫理的な行動、④ステークホルダーの利害の尊重、⑤法の支配の尊重、⑥国際行動規範の尊重、⑦人権の尊重）で構成されていることは前号でも述べた通りです。仏教者が社会に対してこういった責任を果たしていくということが、BSR の本質であります。

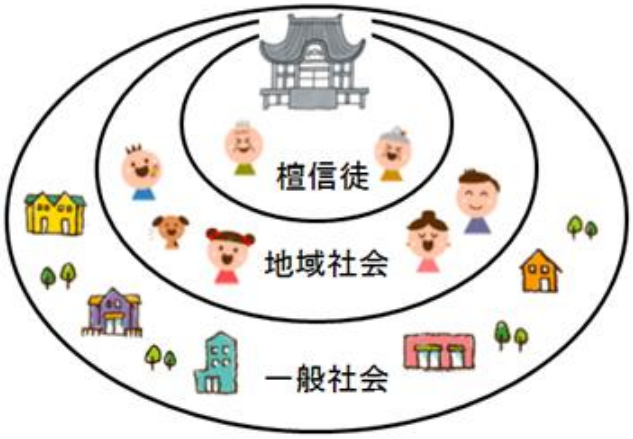
社会の範囲

しかし、私たちが社会といった時に何を思い浮かべるでしょうか。また仏教者という言葉のもつニュアンスは誰を指すのでしょう。『大辞林』（第二版、三省堂）によれば、社会とは、生活空間を共有したり、相互に結びついたり、影響を与え合ったりしている人々のまとまり、とあります。仏教者とは、近年よく使われるようになった言葉ですが、ここには僧侶だけでない篤信の仏教徒、仏教精神に基づいた社会事業家などもふくまれます。いずれにしても「社会」や「仏教者」という言葉はその語が指す対象がやや抽象的ですので、もう少し卑近な例で考えてみましょう。お寺という仏法弘通の場所を中心に考えますと、そこに携わる仏教者は住職、僧侶であるといえるでしょう。もちろん仏教徒である檀家さんだって仏教者のくくりに入るのだということもできますが、ここではひとまず僧侶をその中心において考えてみたいと思います。

お寺を取り巻く“社会”

お寺の住職を仏教者と当てはめてみますと、それを取り巻く「社会」にはいくつかの範囲が想定されます。まず一つ目は、檀信徒さんです。お寺を運営していく上で多くの支援を受けることになる、最も重要な人々です。そして、次にお寺を取り巻く地域コミュニティも「社会」であるといえるでしょう。すなわち、寺院の近隣に住む人々のことです。なかには一村一寺のような地域もあるでしょう。そういった地域ですと、地域住民はみんなうちの檀家さんです、というようなことがおきるかもしれません。しかし、多くの場合、地域社会は寺院の檀信徒よりも少し層が広がるはずです。ここまでは顔の見えるお付き合いですね。そして、最後に一般社会があります。寺院と個別具体的に関わることはあまりないけれど、お寺というものの役割に興味をいだいている、そういったまとまりのようなものととらえるとわかりやすいかもしれません。

お寺を取り巻く社会を上記のように３つの層（①檀信徒、②地域社会、③一般社会）に分けてイメージ化すると右図ようになります。檀信徒さんから一般社会へ、社会の対象が広がるにつれその抽象度は増していきます。「社会的責任」を考えたとき、いきなり抽象度の高い一般社会をその対象としても、どこから手をつけていったらよいかわかりません。しかし、顔の見えるお付き合いができる範囲、つまり檀家さんや近隣住民に対して責任を果たす、と想定したらいかがでしょう。「責任」に対する具体的なイメージが浮かぶのではないでしょうか。檀信徒も地域社会も当然「社会」の中に含まれます。まずはここから社会的責任を果たしていくことで、いずれはそれが一般社会の中での認知につながり、仏教者のプレゼンスが高まるということになるのではないでしょうか。



さて、今回は仏教者の社会的責任を、住職の場合に当てはめて、「社会」を考えてみました。しかし、これは社会的責任のひとつの理解にすぎません。仏教者という語句が示す対象を多様にとらえるならば、それをとりまく社会、その社会への責任のあり方も変わってゆくのであろうと思います。下記のイメージ図が抽象的なものを考える上でのひとつの助けとなればと思います。

BSR 図書室

松尾剛次著『葬式仏教の誕生―中世の仏教革命』
(平凡社、2011 年、735 円)

「葬式仏教」といえば、いまや、日本仏教の現状に対する批判の常套句といえるでしょう。ですが、そんな言葉を表題に据えた本書は、逆に「葬式仏教」の持つ豊かさを再認識させてくれる一冊です。

第１章では現代の葬式事情を描き、そこから一気に時代をさかのぼり、第 2 章では古代日本の葬送について論じます。京の都ですら、そこら中に遺体が遺棄され、人々は死体に触れれば穢れ（死穢）が身に付くと恐れていた時代。僧侶も例外ではありませんでした。やがて、遺体を棄てるのではなく、しっかりと弔いたいと願う人々があらわれるとともに、そのニーズにこたえるべく、死穢を乗り越える論理を持つ僧侶たちがあれわれる様子が第 3 章で詳述されます。

第４章では、石造墓の変遷とその背景を丁寧にたどりながらそこに込められた人々の思いを明らかにし、第５章では江戸時代になり、檀家制度が確立され、葬式や法事が寺院の主務となっていく過程が描かれます。

終章において筆者は「葬式仏教から生活仏教へ」と、生きている人々の暮らしに根差した仏教への転換を提言しています。しかし、本書を通読してみると、「葬式仏教」はまさに当時の人々の暮らしに根差したものだったとわかります。そして、それは現代にも通じるものでもあるのです。形骸化したといわれる「葬式仏教」ですが、まだまだ活性化する余地はおおいにあると思われます。

今後の予定

5 月 18 日（日）11 時～12 時　**すがも鴨台花まつり**　鴨台観音堂前
※学長導師による花会式法要
五宗派学生が合同で勤めます
12 時～16 時　鴨台カフェ　僧話花

6 月 21 日（土）11 時～12 時　花会式（真言宗豊山派）　鴨台観音堂前
12 時～16 時　鴨台カフェ　僧話花　5 号館 1 階